



**Data**

監督: マッテオ・ガローネ

出演: マルチェロ・フォンテ/エドアルド・ペッシェ/ヌンツイ  
 ア・スキャーノ/アダモ・デ  
 イオジーニ/フランチェス  
 コ・アクアローリ/アリダ・  
 バルダリ・カラブリア/ジャ  
 ンルカ・ゴビ

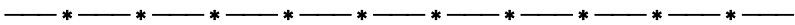
## 👁️👁️ みどころ

本作は、カンヌで主演男優賞と「パルム・ドッグ賞」の他、イタリアで最多9部門を受賞した問題提起作。

犬のトリミングサロンを営む、善良で小心者のマルチェロは凶暴な大男シモーネの支配下に置かれていたが、それはなぜ？また、隣人たちもみなシモーネの凶暴性に苦しみながら、警察に訴えられないのはなぜ？そんな単純な問題(?)を凌駕する、2人の男の「支配と被支配の関係性」をどう考えればいいのかは本作のテーマだが、「大国と小国の問題」にも通じるそんな論点の答えは難しい。ましてや、2人の絆に一種の友情のような香りが漂うと、余計ワケがわからないことに・・・。

マルチェロはなぜシモーネをかばって、自分が刑務所に？そんな本作最大の疑問点を、あなたはどうか解釈？また、クライマックスに見るマルチェロの復讐とその残虐性をどうか解釈？その後の死体処理については・・・？

終映後も考えさせられることの多い映画だが、そうだからこそ本作をしっかりと鑑賞したい。



## ■□■無名俳優が主役に！そして、カンヌで主演男優賞を！■□■

8月26日に観た『火口のふたり』(19年)は、柄本佑と瀧内公美の2人だけしか登場しない映画で、男と女の「身体の言い分」をテーマにした問題提起作だった。それと同じように(?)、本作も「ドッグマン」という犬のトリミングサロンを営む小心で小柄な男マルチェロ(マルチェロ・フォンテ)と、凶暴でドラッグ漬けの男シモーネ(エドアルド・

ペッシェ)の間の奇妙な「支配と被支配」の関係をテーマにした問題提起作。時代は1980年代末、舞台はイタリアの寂れた港町だ。導入部を見ていると、マルチェロとシモーネはそれなりの信頼関係に基づく友人同士のように思えたが、いやいや・・・。

シモーネを演じたエドアルド・ペッシェは有名な俳優だが、マルチェロを演じたマルチェロ・フォンテはマッテオ・ガローネ監督が本作のために見出した全く無名の俳優だ。私は、涙なくして観られない映画『ライフ・イズ・ビューティフル』(97年)が大好きで(『シネマ1』48頁)、同作を監督し、かつガイド役で主演した俳優ロベルト・ベニーニの演技がすっかり頭に残っている。同作では、当初は「おしゃべりのお調子者」というだけのイメージだったガイドが、5歳の息子に対して必死に「これはゲームだよ」とウソの説明をすることによって、強制収容所生活を生き延びようとする姿が涙を誘った。しかして、本作で主演した俳優マルチェロ・フォンテは同作のロベルト・ベニーニと雰囲気実によく似ている。

そんな風に思うのは私1人だけかもしれないが、とにかく本作では、無名俳優ながら主役に起用されたうえ、第71回カンヌ国際映画祭で見事主演男優賞を受賞したマルチェロ・フォンテに注目！

## ■□■この男は善人？それとも・・・？■□■

マルチェロが営むトリミングサロンの前は大きな公園で、犬を散歩に連れてくる人も多いようだから、この手のお店もそれなりに成り立っているらしい。冒頭、マルチェロが獾猛犬を調教している風景が描かれるが、それを見ていると、トリミングサロンの仕事も結構大変だということがわかる。また、マルチェロが離婚した妻との間の小さな一人娘アリダ(アリダ・バルダリ・カラブリア)を溺愛していることもよくわかる。マルチェロにとっては、娘が大好きな海に行って一緒にその中に潜るのが最大の楽しみのようなのだが、他方では、近所の住民と一緒に昼食を食べたり、サッカーの試合を楽しんでいるから、マルチェロの日常生活はそれなりに充実しているらしい。

もともと、それはマルチェロの表の顔。ある日、大男のシモーネの命令で、有無を言えないまま車の運転をさせられ、宝石強盗の幫助をし、わずかな分け前をもらっている姿を見ると、善良な一市民というマルチェロの表の顔とは裏腹の“小悪党ぶり”も見えてくる。さらに、店にやってきたシモーネに対して、娘に隠れてコカインを渡している姿を見ると、マルチェロはコカイン売買の常習犯で、仕入れ先をたくさん知っているうえ、自分も時々その使用をしていることもわかるから、この男の裏は相当な悪党・・・？

## ■□■この2人の絆は友情？それとも・・・？■□■

他方、娘がいても強引に「コカインを渡せ！」と要求するシモーネに対して拒否できない姿を見ていると、シモーネとマルチェロの「支配と被支配の関係」がハッキリ見て取れ

る。もつとも、そうかと言ってマルチェロは完全にシモーネの支配を逃れたいと思っているわけではなく、この2人がそれなりの友情で結ばれていることもわかるから不思議だ。そのため、町の住人たちは度重なるシモーネの暴力沙汰に対して、警察への通報や一致団結しての対抗策を検討していたが、マルチェロはそのことには全く興味がないようだ。そればかりか、マルチェロの隣家で金取引業を営む友人宅へ、マルチェロの店の壁を破って押し入る強盗計画を打ち明けられると、当初は反対したものの、結局マルチェロは渋々シモーネに従うことに。

『ハンナ・アーレント』(12年)では、女性哲学者ハンナ・アーレントはアイヒマンがナチスドイツの理不尽な命令に盲目的に従ったことを「悪の陳腐さ(凡庸さ)」と名付けた(『シネマ 32』215頁)が、さて、この2人の関係をどう名付けたいの？また、この2人の支配と被支配の力関係は一体どこからきているの？

## ■□■イタリアの賞を最多9部門受賞だが、2つの疑問が！■□■

本作は2018年カンヌ国際映画祭で主演男優賞とパルム・ドッグ賞を受賞した他、イタリアのアカデミー賞にあたるダヴィッド・ディ・ドナテッロ賞最多9部門を受賞した名作だが、私には2つの疑問がある。その第1は、シモーネが繰り返している強盗事件は特別手の込んだものではないのに、なぜイタリアの警察はその犯人を逮捕できないの？ということ。コカインの販売使用は重大な犯罪だから、イタリアの警察も重点的に捜査しているはずだし、スクリーン上でシモーネが見せている強引でハチャメチャな押し込み強盗なら、どこかに証拠を残しているのでは？また、住民たちに聞き込み捜査をすれば、すぐに犯人はシモーネらしいというところにたどり着くのでは・・・？

第2の疑問は、私にとって本作最大の疑問になる。その疑問は、マルチェロの隣の金取引所の店が襲われた際、マルチェロの関与がミエミエと見抜いた警察が、それはマルチェロが誰かから協力を要請(強要)されたためだと確信し、取調べ官がその名前を明かすよう散々説得したにもかかわらず、マルチェロが最後まで口を割らなかったのはなぜ？ということだ。名前を言えば家に帰れる。言わなければ刑務所行きだ。何度もそう言われながら、マルチェロが頑なにシモーネの名前を明かさなかったのは一体なぜ？自分が信頼する友人や仲間そして組織を裏切ることを潔しとしない高潔な人々が、あるいは自分の信仰を守る高潔な人々がどんな弾圧にも屈せずに黙秘を貫き、有罪になったり死刑になるケースはよくあるが、マルチェロはなぜろくでもない暴れん坊シモーネをかばってその名前を警察に明かさなかったの？それが私には本作最大の疑問だ。

その結果、マルチェロは刑務所に入れられることになったから、スクリーン上は一転して、その1年後の物語に・・・。

## ■□■出所後、隣人たちは？シモーネは？■□■

映画は便利な芸術だから、一行の字幕だけで1年があつという間に過ぎてしまう。しかし現実には、1年間も刑務所に入っていれば店がつぶれてしまうのは当然だし、定期的に面会できていた、かわいい1人娘との交流もどうなるの？それよりも何よりも、金取引を営む隣の店を襲って金を強奪し服役した男マルチェロが再び帰ってきたら、隣人たちは彼をどう迎えるの？温かく迎えてくれるの？それとも・・・？他方、マルチェロのおかげで共犯者とならずに1年間ノホホンと過ごすことができた強盗の真犯人シモーネは、自分の身代わりになって服役してくれたマルチェロを温かく迎え、正当な報酬（分け前）を払ってくれるの？

マルチェロが出所した後は当然そんな論点が浮上するが、それについての本作後半のストーリー展開は予想通り。つまり、マルチェロはトコトン隣人たちから瓜弾きにされるし、シモーネからは、正当な約束した（？）分け前をもらえないという最悪の事態になっていくわけだ。こうなれば、いくら気が小さく善良な（？）マルチェロでも、もはや堪忍袋の緒が切れ、シモーネへの復讐を考えるのでは？そう思っていたが、意外にもマルチェロはシモーネから分け前をもらえないことも仕方なしと諦めてしまったうえ、さらに「新しいコカインを入手できるようになった」とシモーネにすり寄っていたから、アレレ・・・。この男はトコトンダメ男！そう思っていると・・・。

## ■□■ 獐猛犬もペット犬も檻の中では？ならば凶暴男だって！ ■□■

本作導入部では、こよなく犬を愛する男マルチェロが、可愛いペットの手入れをしている風景の他、檻の中に入っている獐猛犬を懸命に手なずける風景も映し出される。これらはすべて、犬のトリミング店の店主としてやらなければならない業務だが、檻の中に入れた獐猛犬をあれほどうまく調教できるのなら、檻の中に入れた凶暴な大男でもうまく訓練できるのでは・・・？まして、マルチェロの職場はオープンな部屋ではなく密閉された部屋だから、シモーネのような凶暴な男でも、檻の中に入れてしまえば・・・？マルチェロは気は小さい男だが、計算はちゃんとできるし、モノゴトの段取りもちゃんとできる男。したがって、彼なりの戦略と戦術を練れば、身体は小さく力は弱くても、シモーネを檻の中に押し込めるくらいのはできるのでは？そう思っていると、本作のクライマックスに向けてはそんなマルチェロの計算がミエミエのストーリー展開になっていくので、それに注目！

マルチェロがシモーネを見事に騙し、自ら檻の中に入るように仕向けた作戦は、この部屋で大きなコカインの取引をするので、背後の檻の中に隠れ、密売人が背中を見せている間に後ろからそれを襲ってくれ、というもの。密売人を襲うことには何の躊躇もしないシモーネも、狭い檻の中に入るのはさすがに嫌がったが、そこはマルチェロの口のうまさでカバーし、シモーネが檻の中に入るとすかさず外から鍵をかけたから、シモーネは大慌て。なぜ鍵をかけるんだ！鍵を開けろ！開けないとぶち殺すぞ！とわめきながら、檻を叩いた

が、もはや後の祭りだ。さあ、そんな“袋の中のねずみ”状態のシモーネを、マルチェロはいかに料理するの？また、小心者のマルチェロがホントにそんなことを実行できるの？それが、本作クライマックスに向けての最大のポイントになっていくので、その実態はあなたの目でじっくりと。

私はホラー映画は好きではないが、本作では“身の毛もよだつ”と表現されるホラー映画のようなクライマックスのシーンが登場するので、しっかり目を開いて、その残忍ぶりを確認したい。

## ■□法的処理は？それは小事？もっと大切な問題は？■□

本作を弁護士の目線で観ていると、前半ではなぜシモーネが警察に逮捕されないのかが不思議だし、クライマックスに向けては、殺人罪で逮捕されたマルチェロが、情状酌量の余地ありとして執行猶予が・・・？せいぜいそんな興味になるが、イタリアのアカデミー賞であるダヴィッド・ディ・ドナテッロ賞で最多9部門を受賞した本作では、そんなことは小事。もっと大切なことは、マルチェロの心の問題、すなわち、あんなにシモーネに従順で、何事にも小心な男マルチェロが、なぜあれほど残忍な報復行為ができたの？ということ。つまり、「人間の二面性」という本質的問題だ。

さらに、殺人行為を実行すれば、その後は死体の処理が必要。もちろん、そこで自首すれば、それは不要だし、刑罰も軽くなる可能性があるが、マルチェロはシモーネの死体を車に乗せて海辺まで運び、焼こうとしていたから、アレレ・・・。しかも、マルチェロは自分がシモーネを仕留めたことをサッカーに興じている隣人たちに大声で告げようとしたが、隣人たちからは完全に無視されたから、さあマルチェロはどうするの？

『ライフ・イズ・ビューティフル』は、クライマックスに向けての流れがハッキリ示される中で涙の感動シーンを迎えたが、その主役とよく似た雰囲気を持つ俳優マルチェロ・フォンテがマルチェロ役を演じた本作は、感動のクライマックスを迎えるわけではない。逆に、シモーネの死体処理を完了しないまま、静かに自分の行動を振り返り、反省している(?)マルチェロの苦悩の表情がアップで映される中で、映画は終わっていく。したがって、本作の結末、そして、本作全体をどう解釈すればいいのかは、終映後に1人でじっくり考えなければならぬことになる。それはある意味しんどい作業だが、それこそ名作を鑑賞したことの醍醐味！？あなたも本作で、そんな満足感をしっかりと。

2019（令和元）年9月4日記